

相見文庫蔵『新書画展観目録』翻刻と解題（上）： 寛政期の京都書画壇と皆川淇園

田邊，菜穂子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8976>

出版情報：文献探究. 41, pp. 56-73, 2003-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



相見文庫蔵『新書画展観目録』翻刻と解題（上）

—寛政期の京都書画壇と皆川淇園—

田邊 菜穂子

はじめに

相見香雨氏の旧蔵書の一部（三八五点）が九州大学に寄贈されたのは、昭和五十九年。それらは現在、「相見文庫」として、九州大学文学部図書室に収められている。

その中に「新書画展観目録／寛政八年外四回分／^并文鳴十三回忌展會記／芳斉日記添フ」と墨書された和装本一冊がある。相見氏は「東山の書画会」と題する一文において、京都東山で行われていた新書画展観の概要を記したが、この書物は、その際に資料として用いられたものである。

題から知られるように、本書は書画会に出展された作品の目録である。四回分の目録が合綴されており、内訳は以下のようになっている。なお、これら各目録の外題は類似しており、いささか紛らわしいので、便宜上、本稿ではA～Dの記号と書画会開催年次を冠した仮題を付けた。以下、そのアルファベットや仮名を用いて、解説を進めることとする。

- A 寛政八年秋展観目録
- B 寛政九年春展観目録
- C 文化三年春展観目録

D 文政八年秋展観目録

紙幅の都合上、二号に互って、これらの資料の紹介と翻刻を行うこととし、今回は、先ずそのうちのA・B、二種の目録を取り上げる。

さて、寛政期の京都東山書画会について、最も早くに言及したのは、本書の旧所蔵者、相見氏である。「書画骨董雜誌」八十八号（大正四年）に掲載された「東山の書画会」^{（註1）}には、書画会の概要のほか、長沢芦雪の五百羅漢図と中林竹洞の山崎姓についての考察を記す。

この後、「美術史学」昭和十九年一月号に、脇本楽之軒氏が家蔵本を用いて寛政八年秋展観目録を、同年三・四月合併号では、相見氏家蔵の同一本三冊のうち一冊を寄付されたとして、寛政九年春展観目録を、それぞれ翻刻している。本稿では、これらの論考を参考にしつつ、重複しない事柄について解説を加えると同時に、脇本氏の翻刻における不備や欠落を補ってゆくこととした。また、凡例にも示したように、九大所蔵の展観目録には墨または朱の書き入れが散見する。これらが寛政期のものなのか、後年の所蔵者の手によるものなのかは、今判然としないが、ともあれ、出展者の称や住所などを書き加えたこの墨書きも見逃し難く、あわせて翻刻することにした。

一 寛政期の書画会と目録

たとえば『平安人物志』は、天明二年（一七八二）版の次に刊行されたのは、文化十年（一八一三）のこと。その空白期間に該る寛政期に刷られたA・Bは、当時の京都書画壇を知る上で非常に有効な資料であることは疑いようもない。更に、この展覧の出品者は、『平安人物志』に載るような著名人のみではない。有名・無名、老若男女、御用絵師から非職業画家まで取り混ぜ、流派を限ることもなかった。そのことも、この書画会及び本資料の価値を高める重要な要素と言えよう。また、本書には多くの文人達の名も見え、書画壇のみならず文壇の研究にとつても好資料となっている。にも拘らず、近世文学研究において、この資料の利用される機会を多く見受けられないのは、伝本が極めて少ないことに起因する。

管見によれば、A 寛政八年秋展覧目録は、相見文庫本と脇本文庫本^{註2}の二点のみ、B 寛政九年春展覧目録は、相見本、相見氏から譲られたという脇本文のほか、刈谷市中央図書館村上文庫本（国文学研究資料館所蔵マイクロフィルム 30-10989）の計三点しか伝わらない。展覧目録という資料の性質上、発行部数も少なかつたに違いないし、後印本が存在するはずもないので、伝存が少ないのはやむを得ない。なお、B 寛政九年展覧目録中の挿絵横に「雅集席上記」と彫られた印が見え、この目録が、展覧終了後に記録・報告を兼ねて刊行されたものであると分かる。

さて、この東山で行われた新書画展覧の発起人が皆川淇園であること、そしてその始めが寛政四年であることは、早くより知られるところである^{註3}。

書安喜生得小幅五百羅漢図事

蓋シ余嘗テ欲シ振^{ハント}京師・浪華・江戸ノ書画ヲ、因^テ勸^メ平生所ノ識^シ諸書

画家^ニ、毎歳春秋期^レシテ日ヲ、各携^ハ其^ノ所^ノ為^ス書画^ヲ、集^メ会^ス于東山^ニ。命^ジ曰^ク「フ新書画展覧^ト。自^ニ壬子^一至^ニルマデ去歲戊午^一、凡十四会、毎会所^レ集^ル或^ハ至^ニル三四百幅^一。乃^チ其^ノ所^ノ風靡^{スル}至^リ有^リ海外諸邦^ノ民^モ亦^モ寄^セ人^{其^ノ所^ノ為^ル為^ル、以^テ列^{スル}中^ニ之^{其^ノ会中^ニ上^ニ。噫亦盛^{ナリ}矣。是^ヲ以^テ京師ノ諸}書画家遂^ニ又競^ヒ出^ニツ新奇^一」。}

（後略）

（文化十三年序『淇園文集』前編卷十一^{註4}）

京阪及び江戸の書画壇振興を願い、常より交流のある書家・画家に声を掛け、毎年春と秋の二度、東山において書画会を開催した。それは壬子（寛政四年）から戊午（同十年）までに十四回に及んだと言っのだから、毎年欠くことなく行っていたということになる。

この書画会の開始と殆ど期を同じくして、寛政四年閏二月に『淇園詩集^{初編}』（三卷三冊）が刊行された。この年『続虚字解』（二卷二冊）も上梓。淇園五十九歳にして、その活動は精力的で、生彩を放っていた。この後、淇園の文集は二種発刊されている。一つは『淇園文集^{初編}』（三卷三冊、寛政十一年仲冬刊）。これには、寛政四年、西河永成の序、同十一年柚木太淳の後序が備わる。恐らくは、先に出た『淇園詩集^{初編}』と同じ時に成ったものであったろうが、如何なる理由があつたのか、些か時を経ての刊行となつた。いま一つは、先述した「書安喜生得小幅五百羅漢図事」が載る、木活本『淇園文集』（前編十二卷十二冊、後編三卷三冊）。刊記は無いが、前編は文化十三年の序を持つので、淇園が文化四年五月十六日に没した後に、編纂されたものと思われる。

さて、これらの文集を捲っていくと、淇園が当時の諸書画家と密接な繋がりを持っていたことがよく見てとれる。請われて画賛を送ることも度々であつた。展覧のことに關する記述も散見するので、以下、年次順に抜き出した。

寛政四年 壬子 淇園（以下同）五十九歳

◎春、初めての新書画展観開かれる（文化十三年序『淇園文集』前編卷十一「書安喜生得小幅五百羅漢図事」）。

寛政六年 甲寅 六十一歳

◎仲秋五日、東山双林寺にて新書画会。文中に「新書画展観」の語はないが、書画会の開催時期や場所等からみて、いわゆる東山の新書画会であろう。後に三百も集まることとなった出品点数も、この時点では少なく、「凡五十幅」である。

書画展観品目名字録首引

芸事以^レ儔^ル為^レ選^ト。而^{シテ}不^レ觀^ニ之^ヲ於^ニ其^ノ聚^ニ、則^チ靡^ニ以^テ昭^ラカニ
スルコト其^ノ雋^ル焉。且^モ也。巧者^ハ可^ニシ以^テ鑑^ミ拙者^ハ可^ニシ以^テ効^フ
巧ヲ。是^レ余之所^ニ以^テ勸^ム畫画家相聚^ル。之^ノ志^ハ是以^テ地無^ク分^ニ
遠近^マ人無^シ論^ニ齡^ヲ。業^ハ与^ニ不^レ業[、]皆^ハ各^ニ以^テ其^ノ所^ニ作^ル駢^ニ
列^ス一堂之上^ニ。而^{シテ}其^ノ月旦品評任^{セテ}之^ノ衆目^ニ而優劣自^ラ分^ル乎不^レ言^ニ之
中^ニ矣。此^レ又其^ノ衆所^ニノ相聚^云スル之本志也。甲寅仲秋五日始会^ニ於^ニ洛
東双林寺^ニ。其^ノ所^ニ駢列^{スル}畫画凡^ソ五十幅。今^ニ其^ノ品目名字^ヲ以^テ
識^ス其^ノ盛^ル事^ヲ於^ニ他日^ニ。如^キ余拙作^ノ乃^チ亦所謂^ヲ請^フ自^レ隗始^ル者耳。

（文化十三年序『淇園文集』前編卷六）

寛政七年 乙卯 六十二歳

◎三月二十五日、東山多藏庵にて新書画展観。

杉林茂信所集書画冊序

乙卯春三月念五日、余作^ス書画会於^ニ東山多藏庵^ニ。凡^ソ海内之能者率皆寄
致^ス其所^ニ作^ス書画^ヲ。而^{シテ}京師ノ名家大率皆集^ル。其日杉林茂信来^リ。造^レ
庵^ヲ而謁^シ予^ニ曰^ク、僕考妣^ノ墓塋^ハ在^ニ東山某地^ニ、而僕近構^フ小庵^ヲ
於^ニ其塋^ノ側^ニ。以^テ考妣生平並^ニ皆好^ニ畫^ヲ、以^テ為^ニ庵中之所藏^ト、而供^ヘ先人之靈玩^ニ。今聞^ク斯会^ノ諸彦
皆在^リ。願^ハ藉^リ先生之力^ヲ、以^テ請^ニ諸彦之筆跡^ヲ于此冊^ニ。余感^ジ
其孝思之深至^ニ、乃^チ為^ニ請^ニ諸賢^ニ、各占^ニ其冊^ノ一紙^ヲ、又為^ニ識^ニ
其事^ヲ於^ニ首端^ニ。

（文化十三年序『淇園文集』前編卷一）

書飲中八仙歌図双幅副卷

弟剛中画^ク飲中八仙図^ヲ。余為^ニ之[、]書^シ杜甫ノ歌^ヲ作^ス之^ノガ副^ト。
乙卯春三月二十五日、与^ニ諸友[、]作^ス新書画展観会^ヲ于^ニ東山多藏庵^ニ。余即
命^シ掛^ニ其^ノ双幅^ヲ。時^ニ有^リ備前兄島那須耕助。適^シ来^リ在^ニ京^ニ
与^ニ其^ノ会^ニ。及^ニ其^ノ帰^ニ也。余因^テ遂^ニ以^テ其^ノ双幅^ヲ贖^ニ其^ノ別^ニ。耕助
帰^ル後、需^ム之^ノガ記^ヲ。因^テ為^ニ書^ス之^ヲ。七月八日

（文化十三年序『淇園文集』前編卷六）

寛政八年 丙辰 六十三歳

◎九月二十七日、東山端寮にて新書画展観。（A 寛政八年秋新書画展観）

寛政九年 丁巳 六十四歳

◎三月廿七日、東山清水寺にて新書画展観。（B 寛政九年春新書画展観）

寛政十年 戊午 六十五歳

◎四月、新書画展観。長沢芦雪、方寸幅五百羅漢図を出展す。なお、東山の
新書画展観、この年までに計十四回、開催。

〔前略〕長沢芦雪素^リ以^レ善^テ畫^ク聞^コ。而^テ筆^尤モ縦横^{ニシテ}乃^チ
其^ノ所^ニ出^ス、毎^々益^奇ナリ。去歲夏四月、所^ノ出^ス方寸幅中作^ル五百羅漢^ヲ。
〔中略〕寛政己未（田邊註十一年）秋八月十一日
（文化十三年序『淇園文集』前編卷十一「書安喜生得小幅五百羅漢図事」）

以上、『淇園文集』を中心に、寛政期の東山書画会の様子を探ってみた。こ
れだけでも展観が毎年、恐らくは春秋の二度、開催されていたことの傍証とな
り得るだろう。

二 寛政八・九年書画会に関する覚書

（1）書画会主催者嘯風亭

嘯風亭は、会の運営を掌った人物であるが、目録より同時に出品者であった
ことも知られる。「墨竹 雄選^{号嘯風亭 霞雅門人}」（寛政八年）、「墨竹 雄選^{霞雅門人 称新六}」
（同九年）。雄選は霞樵、即ち池大雅の門人であった。
文化十年刊『平安人物志』（「好事」項）には「秦良選^{字擇見嘯風亭 姉小路東洞院東 称新六} 雄崎
新六」とある。姓名を一字ずつ修し、「雄選」と名乗っていた。

この人物については相見氏の「池大雅」^{（註5）}、『池大雅』大正五年八月、美術
叢書刊行会・「大雅の画譜」（「南画研究」一ノ一〇）二ノ五、昭和三十二年
十二月―三十三年五月）に詳しく、晩年の大雅に最も近い人物の一人であっ
た。

とは言え、この人物についての伝は少ないので、ここに一つ加えておく。
筑前国より上洛した大熊言足が嘯風亭を訪れた。文政六年四月のことである。

廿五日。祐匡主の兩人、名古屋より美濃路をへて、嘯風亭にいたり、扇
面帖を見る。帖中、大雅・玉瀾・栗山・淇園・栲亭など、諸名家書画も
らさずのせたり。大雅堂遺印、數顆押ししかへる。彼名高き已千里道行、
未讀百卷書、また半癡半點主人など刻たる印も此家にあり。

（『大熊言足紀行』^{（註6）}）

文化十年の『平安人物志』「好事」の項に掲載されて後、嘯風亭は後版の同
書に名を見せないの、いわゆる「好事」者としての活動は、もはや第一線を
離れたものであったのかもしれない。少なくとも、世間にはそのように認識さ
れていたであろう。しかし、いまだ存命、大雅の遺品を大切に所蔵し、遠国
より訪うた人に閲覧を許していた。

（2）寛政八年展観の開催場所

書画会開催場所について、脇本氏は「九年春の会場とした清水寺は恐らくあ
の成就院あたりであらうが、八年秋の端寮は何処。」と書いている^{（註7）}。A 寛
政八年展観目録に「寛政八丙辰秋九月二十七日東山端寮展観」とあるが、確か
にこれだけでは、何処なのか分かりにくいかもしれない。

「端寮」とは現在の東山区円山公園内の安養寺にあった。

天明三年三月、俳諧師暁台は芭蕉百回忌取越追善を興行した。幻住庵、金福
寺、そうしてもう一箇所、洛東安養寺端寮においてである^{（註8）}。

安養寺としては、今、本堂しか残らないが、もとは「円山六坊」と言われた

塔頭（勝興庵正阿弥・長寿院左阿弥・多福庵也阿弥・花洛庵重阿弥・延寿庵連阿弥・多藏庵春阿弥）を有していた^{（註9）}。端寮とは、このうち、花洛庵を指した。寛政十一年刊、秋里籬島編『都林泉名勝図絵』（五卷五冊）^{（註10）}を見てみよう。

円山 安養寺といふ。吉水大懺法院の故墟也。慈鎮和尚棲給ふ事百鍊抄に

見へたり。坊舎六宇山崖に建統て、亭閣、林泉、玲瓏として洛東の佳境也。

長寿庵左阿弥・勝興庵正阿弥・花洛庵清阿弥又端寮といふ・多福庵也阿

弥・延寿庵連阿弥・多藏庵春阿弥。（後略）

同書中、円山安養寺の絵は、実に十一図にも及ぶ。そのうち件の端寮は、「玄関」の図、それから庭と三層の建物の図、の二つが収まる。図中には、描かれた名所に関する和歌や漢詩、俳諧の発句が彫られており、端寮の圖には三宅嘯山「遊端寮」と六如庵慈周「東山席上題円心拳画」の詩が見られる。

東山席上題「ス円心拳画」

山秀テ川廻「ク帝州」ヲ

欄前ノ万景在「リ毫頭」ニ

丹青天下無双ノ手

佳麗東山第一楼

右指言端寮也

永田観鷲曾「大書」此五字「扁」ス于其楼ニ

六如庵慈周

円山安養寺の花洛庵清阿弥は、「端寮」とも「東山第一楼」とも呼ばれ、そこに集う人々に親しまれてきた。淇園の詩集や文集にも、「端寮」、「東山第一楼」の字は度々見られる。今、指摘すれば「春晚同諸子宴於東山第一楼」（『淇園詩集』^{（註11）}卷之二）、「送高野生帰水戸」^{（註12）}東山端寮翁得「先」（写本『淇園文集』卷二）、「東山端楼送僧志徳帰播」（同卷二）など。

淇園を含め、当時の在京の者にとつて、端寮は、宴会の場として、更に書画会などの会場として、非常に馴染み深い場所であつた。また、先に記したように、寛政七年春の新書画展観は、「東山多藏庵」で開かれており、これもまた、安養寺の六坊の一つ。端寮だけでなく円山六坊全体が、麗しい庭園を有し、京の町を見下ろしながら寛ぐ、遊興の場的存在であつた^{（註11）}。それは先に挙げた、『都林泉名勝図絵』に掲載される十一葉の画にも明らかである^{（註12）}。既に延宝五年刊『出来斎京土産』中に、この寺を指して「遊覧酒宴の場」とする。ここで行われた新書画展観も、或いは肩肘の張らない、飲食をも伴った会であつたのかもしれない。

三 翻刻

凡 例

- 一、九州大学文学部図書室「新書画展観」（相見文庫・和・33）を底本とした。
- 一、本書は四点の資料が一冊にまとめられた合綴本である。よつて、先ず本書全体の書誌を示し、一点毎の書誌はその翻刻の前に一々示した。
- 一、原本の記載通りに翻刻することを基本とし、漢字の旧字体も全て原本のまま

まとした。割註表記も原本に従ったが、行間などの都合上、表記出来ない場合のみ「／」を以って改行の印とした。

一、絵については「絵へ」と示した（へ内は絵柄の説明）。

二、印については「印へ」の如くに示した（へ内に印文。なお、その際、朱印実捺は「朱印へ」、印影を彫りつけて墨刷りにしたものは「刷印へ」と表した。

一、改頁などは「一才」の如くに示した。

一、書き入れがある場合、「朱」「墨」のように表した。

一、虫損等で解説不可能の箇所は□で示した。

書誌

所蔵 九州大学文学部図書 相見文庫・和・103（合綴）

書型 縦一四・三糎 横八・八糎

表紙 後補。鳥の子色地に煎茶色の斜め格子縞。

外題 「新書画展観目録／寛政八年外四回分／^并文鳴十三回忌展會記／芳斎

日記添フ」と打付墨書。

構成 A 寛政八年秋展観目録

B 寛政九年春展観目録

C 文化三年春展観目録

D 文政八年秋展観目録

蔵書印

Aの表紙に「相見氏／圖書記」（二・六糎 一・八糎）の印。その他の印については、AとBそれぞれの書誌の箇所述べる。

（A）寛政八年展観目録

（1）書誌

書型 縦一四・三糎 横八・八糎

表紙 原表紙。薄茶色。無紋。

外題 「新書画展観目録 全（子持ち梓・左肩・刷り）

構成 本文二十一丁半

匡郭 四周单边（二・七糎 七・五糎）

罫 有り

板心 「辰九 一（二・二十二）

丁付 一（二・二十一）

挿絵 半丁（二・ウ）

印 「相見氏／圖書記」（表紙中央下方 朱陽長方 二・六糎 一・八糎）

「嘯風亭／圖書記」（見返し左下方 朱陽長方 縦四・一糎 横二・

三糎）

備考 墨の書き入れあり。

（2）翻刻

新書画展観目録 全

朱印〈相見氏／圖書記〉

「表紙

東山新書畫

展観 朱印〈嘯風亭／圖書記〉

「見返し

絵〈墨菊図〉

「一才

寛政八丙辰秋九月二十七日東山端

寮展観

目次

右丞相大炊公書及七卿五侯書畫通

計十三幅見別卷

墨畫壽星

行書五大字

墨竹

楷書紅梅詩

篆書五大字

墨菊

武人避雨圖

村女携花圖

艸書夏夜獨酌詩

濃彩養老瀑布

行書岩垣龍溪詩

隸書管公画像詩

行書

墨畫山水

楷書書丹銘

行書雪月詩

同雪鴉詩

墨竹

楷書書論

五百羅漢圖

四木希仙

三宅乙龍

岸卓堂

海古王

源雲林

平岐山

大井春濤

全

皆川淇園

土佐守

木子玉

上田蘭

源南汀

世古霍

林正典

柚木鶴橋

全

僧明堂

源西河

滕若冲

称八郎兵衛

七歳童

嘯山孫

十一童

雅樂助男

若藩眼医官

名孟熙

称幸三郎

土佐光貞

岩垣門人

伊豫寺

永田門人

称權助

号藏六

永田門人

名宗昭

称永田主書

1ウ

着彩富岳圖

行書湖莊詩

墨梅

楷書淵明詩

行書詩二首

源語第一卷圖

夜伯圖

水墨山水

淡彩鯉圖

艸書尋隱者詩

着彩牽牛花

行書漁村詩

着彩牡丹衆禽

行書經語

水墨山水

淵明圖

水墨山水

着彩宋諫臣

同梅鷄

楓溪雅集圖

行書山水詩

水墨月竹

着彩羊

行書高雄山詩

法眼東洋

江村大臨

吳月溪

源邦彦

僧蕉中

恒枝光安

松山元吉

僧馨曜

源卓章

畠中觀齋

源應瑞

清龍川

源琦

龜井道載

餘夙夜

紀竹堂

僧馨曜

内藤如園

山口素絢

河村文鳳

柴野栗山

平野叙之

源卓章

中野季文

号岳

北舅

称聖造

岩門人

称聖造

土佐門人

字大成

竹屋門人

能州人

岩門人

称龍藏

圓山門人

称圓山主水

筑前文字

住大雅堂

再見

若州人

岩門人

号山齋

名賢(註13)

称彦助

作州人

江言權臣

竹堂門人

再見

称三郎

尾州人

4才

5ウ

5才

水墨山水 絹本	小栗金壺 名光胤	楷書放翁陸詩	清溪 上岡人
墨画大公望	藤原光孚 土佐備後助	着彩八仙圖	片山 岳 称周庵
行書葛原晚帰詩	大町若水 名淳伯	水墨官奴逢妖圖	村上松堂 称秀丞
着彩五猿	恒枝元章 称金吾	行書杜詩 七律	小島牧卿 称典膳
行書秋蝶詩	鈴木桂雲 福山医学士佐門人	水墨山水 絹本	山崎成昌 景薫 尾州人
着彩櫻花	平氏 名慧一	墨蘭 因州人	土方稻嶺
水墨竹 并詩 絹本	僧玉 緒田岐山室	行書古詩	植田久圓
行書題隱居詩	源五雲 岩垣和泉寺	着彩 鳥 絹本	源波響 松前藩執政
着彩美人圖 絹本	源瑛昌 称上殿重吉 圓山門人	行書烏衣巷詩 絹本	橘梅僊 前石見介
同猫	原在明 在中次子	同鶴詩 寄楓木 崔鶴詩	毛俊臣 名狂号宗 経基球大夫 浪華人
水墨山水 乃翁讓 絹本	村井氏 字士蓮 痴道人女	水墨山水	武禪 浪華人
着彩宋主碎七寶器圖 絹本 大幅	可觀堂 称岸雅樂助	艸書紅友詩	源東塙 称出原伊平
行書茶歌	細合半齋 名方明	隸書贈友詩	村上彦峻
着彩王母圖 絹本	源章 称井川彦長衛 圓山門人	水墨藍采和	八田虎洲
同楊妃圖 絹本	源豊彦 称岡本圭平 月溪門人	淡彩張良賣劍圖	岡田伯寛 播州人
同卓文君圖 右對幅	全	着彩龜圖	蘇子黄 文雅男 佐久間門人
艸書五大字 文章老自知	畑橘洲 醫学院 法印義子	同鶴圖	黒川仲徳 艸僊甥
着彩花鳥 絹本	白芝山 淡州人	富嶽秋景圖 絹本	加茂専顯 山本伊豫 權守
行書秋夜詩	源長尊 称堂藏 岩垣支族	水墨菊	僧觀了 能州人
着彩賞楓圖 絹本	佐久間艸僊	行書山水詩	田暢齋 名器 霞橋門人
淡墨山水 絹本	僧自淨	同春夜 七絶	僧六如 伊勢人
行書一大字 壽海	井上吉久 圓山門人 百太翁 上田門人	同菊詩	松浦長義
同二喬讀兵書詩	杉岡公曙 名道 啓 伏木主/府医官	着彩瀑圖 絹本	秀雪亭 名顯 圓山門人
水墨山水 絹本	大原 呑 響 (墨) トンキヤウ 松前藩 門客	水墨山水 并詩	在原無極 伏水人 文藏 称文藏
		著彩八僊圖	飛田文真 同門人

墨梅	吉村蘭洲	圓山開人	—	墨画寒山拾得	絹本	白井直賢	圓山開人	—
淡彩山水 絹本	田村長蘭	称十兵衛	11才	行書西湖詩		平章	称善一	13ウ
山水春景 絹本	中村鳳中	浪花人		艸書友至詩		田庸之	称善平	
同夏景 同	全			楷書韓公碑 大幅		慶興	雲松齋	
着彩仙閣圖 絹本	源東谷	名武政		彩画鹿 絹本		柴如玉	備陽人	
彩画花鳥 絹本	阮道卿	江戸人		着彩紅葉翠鳥 絹本		源景文	称松村直二	
雪梅圖 絹本	僧維明	源左衛	11ウ	行書五大字		河合東洲	月溪弟	14才
草書山水詩	馬谷	園部文学		草書二大字 觀驚		堀騰雲	称式部	
行書桃山懷古詩	中居竹山	浪花人		行書詩二首 山静以本古 目長如小年		餘東郭	称文太夫	
艸書古詩 一聯	橘觀齋	名應		同送別詩		三宅嘯山	字虎卿	
行書青蓮詩	伊藤東所	古義堂		水墨蟾蜍 白山贊		松本奉時	浪花人	
同秋蝶詩	赤松大業	赤穂文学	12才	着彩櫻花		三熊氏	字露著	14ウ
着彩桃林會盟圖 絹本	僧觀月	大泉寺		行書 江道橋落 菊花黄		國松氏	梅登妹	
草書紅葉詩	圓秀明	称作兵衛		同月夜詩 藤貫園		藤憲時	近藤上平	
着彩山水圖 絹本	劉高臺	福知山		艸書落葉詩 七絶		岸友仙	名黙	
行書金福寺詩 和清龍川 詩	賴千秋	文学		淡彩布袋和尚圖		黒川竹溪	竹富門人	
同雨中詩 七律	源栲亭	文学	12ウ	行書笠翁詩		長澤貞隣	名貞	15才
墨蘭	兼葭堂	浪花人		行書山谷詩		細邊子田	称元厚	
隸書 畫於 自然	栗虔甫	永田門人		着彩蘆鷺 并詩		檀徂卿	称藤氏衛	
行書有感謝	大川滄洲	字瓊花		同春山賞遊 絹本		膝關山	竹富門人	
水墨山水 絹本	平氏	金龜母		行書山水詩 五律		藪四明	称茂二郎	
墨竹	市川君主		13才	篆書牧齋詩		文雅堂	名良映	15ウ
墨竹 絹本	安黙卿	江州人		水墨山水 細橋洲贊		阮南溪	称長左衛門	
行書題画詩	佐野山陰	阿州		着彩桂樹 絹本		山跡鶴嶺	称貫一	
露竹圖	小林龜溪	称顯堂		淡彩壽星 三浦乾寶 絹本		僧月仙	五瀬人	

墨画海蟾鍊粉 絹本
 行書蘭詩
 着彩菊
 淡彩鶴 絹本
 楷書二大字 寬麗
 行書美人圍碁詩 五律
 文丞相圖 絹本
 淡彩茅齋圖 絹本
 楷書桃源記
 着彩鯉圖 絹本
 水墨虎
 行書 閑看秋水 心無事
 着彩木綿鴿圖 絹本
 淡彩山水 絹本
 墨画寒山拾得
 同鴈蘆 絹本
 行書蓮詩
 墨画弄胡孫
 行書五大字
 墨画月雁
 水墨 鷺
 著彩布袋和尚圖 絹本
 行書經語
 墨画山水
 行書朱文公詩

狩野永傳 称内匠
 藤正芳 称監物
 武市氏 士藏安
 高畠氏 岸門人
 村田中龍 字藁蘭
 同門人
 名祐信
 淀文学
 太田玩 再見
 紀竹堂 再見
 狩野永誼 称東馬
 白芝山 再見
 片山楊谷 称雷馬
 因州人
 名豫章
 西村楠亭
 藤正懿 称伊達郡司
 永田門人
 称忠兵衛
 月溪門人
 名辰
 澤吳龍 圓山門人
 山本探淵 應奉次子
 木應受 士藏安
 江馬氏 濃州人
 赤石鈍雅 称傳 郎
 寺田子鸞 皆川門人
 山口貞恒 称傳之進
 山本門人
 称茂助
 栗山風谷
 鶴澤探索 画官
 西依成齋 九十五翁
 僧月峯 双林寺
 認学
 称崎 郎
 上田門人
 文翠

16 才
 17 才
 17 ウ
 16 ウ

同勸学詩
 艸書七大字
 淡彩王母 絹本
 行書壽星詩
 水墨山水
 行書座右銘
 墨画東坡
 俳諧歌意圖 毎小圖録
 桃青句
 着彩鷄冠花 絹本
 墨画松下問童圖
 都人賞花圖
 隸書山水詩
 着彩木芙蓉 絹本
 同山水
 行書韋應物詩
 着彩狗子圖 絹本
 同蘇晋長齋圖
 淡彩鼠圖
 同山水
 着彩壽星圖
 墨画 王維寫鳴澗
 詩意并詩
 艸書五大字 絹本
 墨竹

官維一 名精
 永田門人
 称清藏
 角子寶
 谷文晁 称文五郎
 江戸人
 六疊堂
 上田門人
 丹波人
 僧雪峨
 三崎温亭 称主銘
 長澤蘆雪
 河村文鳳 再見
 紀元直 嶋田主計頭
 源正鄰 称入亭
 嶋田門人
 田中楠塘 称直造
 松本愚山 名慎
 源輝 称脇坂彦九郎
 圓山門人
 田村壽秀 号東溪
 藤潤甫 濱路少監物
 上田門人
 称佐々木俊助
 圓山門人
 直行 圓山門人
 甲賀文麗 村上門人
 白井直賢 再見
 青來 称左平
 岡田伯寬 再見
 皆川淇園 再見
 村井中漸 八十九翁
 号嘯風亭
 霞橋門人
 雄選

18 才
 19 才
 19 ウ
 20 才
 20 ウ

以下八家雖歸泉下未周年故樓西廂

掛之聊漏追慕意耳

水墨山水 絹本

津田一清

行書梅魂詩

香山適園

淡彩鴨 絹本

源應舉

楷書枯詩 七律

伊藤君嶺

墨竹 絹本

吉田元陳

行書秋夢詩 七絶

柚木太輔

同舟行曲 詞餘

源東江

墨画龍 絹本

風折有丈

右通計二百十二幅隨見而録之云

平安雄選識於嘯風亭

裏見返し

21ウ

21才

「巳三二(二十二) 嘯風亭」

丁付 一(二十二)

挿絵 半丁(序の前半丁)

印 「嘯風亭／圖書記」(見返し右上方 朱・陽・長方 縦四・一糎 横

二・三糎)

備考 「世」(見返し左下方 墨刷・陰・方 縦〇・六 横〇・七)

「龍」(見返し左下方 墨刷・陽・方 縦〇・六 横〇・七)

「雅集／席上記」(序表 墨刷・陰・長方 縦一・四 横一・〇)

「皆川／愿印」(序裏 墨刷・陰・方 縦一・五 横一・四)

「伯恭／氏」(序裏 墨刷・陰・方 縦一・五 横一・四)

「雄」(二丁裏 墨刷・陰・方 縦〇・八 横〇・八)

「選」(三丁裏 墨刷・陰・方 縦〇・八 横〇・八)

「愚」(跋末 墨刷・陽・方 縦〇・九 横〇・八)

「山」(跋末 墨刷・陽・方 縦〇・九 横〇・八)

朱の書き入れあり。

見返し上方「嘯風亭／圖書記」の印は、刈谷市中央図書館村上文庫本にも、本書と同じ箇所に見られる。

(B) 寛政九年展観目録

(1) 書誌

書型 縦一四・三糎 横八・八糎

表紙 原表紙。薄茶色。無紋。

外題 「新書画展観目録 全」(子持ち枠・左肩・刷り)

構成 序半丁、本文二十二丁、跋半丁

序文 皆川愿(皆川淇園)

跋文 愚山(松本愚山)

匡郭 四周单边(二・五糎 七・四糎)

罫 有り

板心 序「巳三 嘯風亭梓」

本文「巳三一 嘯風亭梓」

(2) 翻刻

新書画展観目録 全

「表紙

朱印「嘯風亭／圖書記」

東山新書畫

展観 牛山書

刷印「世」

刷印「龍」

「見返し

篆書二大字 思無邪

淡彩山水

墨竹

墨畫梅竹 對幅

着色蟾蜍攀松圖

行書探梅詩

艸書一行

行書大字 對幅 龍吟 魚躍

淡彩山水

淡彩山水

墨菊

着色戲童圖 絹本

行書七絶

墨竹

行書唐句

墨竹

着色胡人狩獵圖 絹本

行書一行 溫良恭儉讓

墨画月下鶴 絹本

淡彩寒林飛泉 絹本

行書心經 絹本

臨金丹四百字

淡彩山水

讀歎品 染絹本

行書舞賦

藤市仙 重出

雪樵園 蘭蘭人 甲斐人

鈴木小蓮 芙蓉男

井岡元泉 稱大藏 江戸人

松本奉時 稱周助 大坂人

宮子玉 名振 丹後人

三宅嘯山 平安 〔朱〕中長者丁室町

藏氏 觀聲間人 名幹々 華

林氏 江戸人

源良景 稱遊遊左近 平安人

江馬氏 十一齡 名多保美濃人

岡屋免蹊 蘭蘭人 稱舍人

紀子璞 伊勢人 伊河村喜兵衛

長谷川繼 土間人 稱啓助

在原幸恕 文間人 伏水人

佐々木直行 圓山間人 稱俊助

源景文 月濤弟 稱松村直一

伊藤東所

藤東帛 播磨人 重出

井岡元泉

糟屋時鳴 江戸人 南蘭人

源杏林 名正之 平安人

藤關山 平安人

榊原台谷 江戸人

女僧玉塙 〔朱〕函谷録丁 文雅門人 〔朱〕稱至徳 6才

行書李益牡丹詩

着色春色山水

行書新書畫展觀詩

著彩西園雅集圖 絹本

艸書五大字 冬嶺秀孤松

水墨雪中山水

淡彩兔

着色牡丹貓圖 絹本

行書五絶

墨畫寒山拾得

丹書書 吟

艸書五絶

着色壽星圖 絹本

着色虎飲水圖

淡彩夏晚山水

艸書三行唐絶

行書舞鶴賦

隸書十二相屬詩

墨菊 源榜亭賛

艸書松岡亭詩

行書王維詩 絹本

淡彩東方朔 絹本

墨画凱陣圖

墨画雪梅

淡彩黃 哺雛圖

紀三學 平安人

村田嵩 竹屋間人 稱元朔

餘東郭 多鳥 在天津

山崎成昌 尾張人 在平安

細合半齋 〔朱〕シン工系 〔上ル〕元來浪花

藤琴臺 尾張人

蘇子黃 〔朱〕四条シン工 佐久間人 文雅男

赤石鈍雅 平安人 觀聲間人

宮維一 名 精 在 大津

紀梅亭 〔朱〕俗立九卜云人 袖木門人 若瀨園醫

海吉王 〔朱〕東洞御池 若瀨園醫

澤村和卿 歸一堂間人 稱玄泰 畫院待詔

土佐土佐守 因幡人 〔朱〕寺町丸本

土方稻嶺 在平安 竹屋間人

八田魏門 稱魏二郎 南蘭人

大村南明 稱忠兵衛

文子堅 〔朱〕平安サカイ丁 文雅門人 稱彦五郎

西山拙齋 備中人

僧月峰 双林寺 西國弥

僧百靈 寶光寺 讚岐

龍松桓卿 稱莊次郎 伊勢人

谷崎蘭山 蘭蘭人 稱聖二郎

野村鈞玄 伊勢人

青地士温 稱彦四郎 平安人

白芝山 〔朱〕四条東洞 淡路人 在平安 8才

鈎勒月竹
草書五絶
淡彩山水
行書山居四律
着色雛鶴圖 〔朱〕京師画工探鯨義子
淡彩海上初日圖
行書三行
隸書二行
着色櫻花圖 絹本
隸書打毬歌 烟橋洲製
西洋文字 烟橋洲題跋
行書春野詩
小楷遺教經 絹本
淡彩山水
墨画太湖石
艸書二行
水墨山水 并題
艸書一行
艸書三行
着色牽牛花蠟 圖
泥金描世尊像 絹本
淡彩花鳥
着色仙宴圖 絹本
行書二行
水墨月梅 柚木鶴橋實

本 絹

可觀堂 重出
河合白鷺 称外記
井上霞山 称清一郎
深谷敬美 大津人
鶴澤探索 江戶人
在原幸恕 重出
源貞一 北小路大和介
中子海 〔朱〕四糸シン丁 文雅間人
三熊氏 海峯妹名
紀二學 露登安人
江馬氏 重出
山本專顯 重出
關克明 其靈男
僧李明 江戶人
岸卓堂 大津
賴千秋 長壽寺
僧雪蛾 雅樂助男
寺田土鸞 安藝文学
江蘭 丹波人
橘公遵 称安二郎
喜多武清 平安人
西岡邦教 上田伊豫
僧月仙 守
伊勢人 圓間人
永田西河 〔朱〕クワンガ男 称圭書
藤政親 竹富間人
村井部太丞 平安人

10 才

9 ウ

9 才

8 ウ

行書二行
篆書一行
淡彩山水 絹本
草書一行
淡彩三十六歌仙圖
行書早春詩
淡彩瀑布
着色牡丹 絹本
艸書上巳長篇
行書詩稿
行書春日郊行詩 西尾元精
臨蘭亭記 大幅
水墨雪鶴 絹本大幅
艸書一行
行書古詩
雪竹
淡彩普化和尚圖
淡彩山水 并題
隸書七言古詩
艸書七絶
淡彩海錯圖
篆書酒德頌
行書遊播州記
楷書千文
着色春山圖 并題

10 才

9 ウ

9 才

8 ウ

度會白圭 称中西此面
三杉敬典 伊勢人
田村壽秀 村井間人
池上元道 平安人
吳月溪 東瀛間人
角鹿子實 称土兵衛
原在正 信濃人
小山高堅 在由男
矢作鴻臺 土方間人
龜井道載 称義助
源長尊 江戶人
蔣田暢齋 筑前人
可觀堂 岩堤氏支族
三宅乙龍 伊勢人
圓明秀 〔朱〕龜△
平一元 八歲童
大原尚賢 嘯山孫
服部良古 近江人
村上彦俊 称佐兵衛
村井自然 土方間人
西村楠亭 称北条孔助
蘇文雅 〔朱〕四糸シン丁 名良英
田龍媒 柚木間人
白井惟德 名太駿
源真足 〔朱〕大宮高正 称元道
竹富間人 平安人

12 才

11 ウ

11 才

10 ウ

淡彩人物山水 絹本
 着色劉阮天台圖
 艸書一行
 淡彩菊
 行書石垣龍溪詩 二熊鑑者
 行書七絶 写詩意
 淡彩鷺圖 絹本大幅
 隸書孟子語
 行書雨中春望應
 墨竹友石
 行書五絶
 行書文賦
 着色山水 并題
 行書掃塔古詩 絹本
 行書桃李園序
 着色關帝圖
 着色浣衣女圖
 淡彩山水 秦鼎贊
 淡彩子路負米圖 源時言
 淡彩秋色山水 贊繪果
 西洋文字
 草書茶語
 行書長樂寺聯句 橘洲乾
 水墨山水 賣山隱
 墨蘭 并題

山口素絢 〔朱〕四糸高倉 圓山門人
 村上松堂 〔朱〕室十五糸 岸門人
 西谷二松 竹富門人
 簀其道 称九造
 甲田子玉 岩田門人
 大川滄洲 称正顯
 赤穂文學
 白芝山 重出
 村田中龍 称中造
 平安人
 越智世俊 法眼窮
 竹富門人
 松山大成 越後人
 永岡人
 源清貞 平安人
 文字磬 〔註〕14 〔朱〕鴻池ノウモ 文雅門人
 平安人〔朱〕宗七
 皆川淇園 三出
 僧百靈 重出
 源掉湖 号歸一堂
 南園義子
 源章 圓山門人
 並河彦兵衛
 山口素絢 重出
 巢来山 尾張人
 源惟功 竹富門人
 美作人
 黒川竹溪 竹富門人
 称貞藏
 岩田門人
 大町宗司 平安人
 三宅乙龍 重出
 佐野山隱 阿波人
 餘夙夜 東山〔朱〕青木圭五門
 大雅堂
 多田氏 名惠美

12 才

13 才

14 才

着色櫻譜 諸名家贊
 墨画紀貫之像 絹本
 淡彩雨景山水 絹本
 篆書座右銘 大幅
 墨画龍虎 對幅
 淡彩松林山水
 墨竹
 淡彩人物
 墨書山水
 隸書二行
 淡彩竹林寺圖
 金字舞鶴賦 紺紙
 淡彩秋林讀書圖
 着色宴桃李園圖 皆川淇園
 行書花下宴詩 絹本
 着色太上老君 絹本
 荊竹圖
 着色山水
 淡彩山水
 草書七絶
 行書一行
 淡彩烏骨鶏
 墨竹
 以下五十幀賜杖堂社中
 行書緑牡丹詩 竹堂画
 清龍川

織田氏 岐山妻
 名基友
 佐久間草偃 〔朱〕フヤ丁アヤ下ル 土佐門人
 平安人
 吉村蘭洲 圓山門人
 平安人
 藤仙嘯 三雲孝之助
 秀雪亭 〔朱〕スハノ子 高弟
 上田耕夫 平安人
 武市氏 岸門人十二歳
 名鼎
 寒巖 称北山文卿
 江戸人
 十時梅厓 称半藏
 伊勢人
 栗虔甫 觀聲門人
 平安人
 藤桃齋 阿波人
 在平安
 出原東塢 称伊兵衛
 月溪門人
 橘豊彦 称岡本幸平
 平安人
 紀竹堂 名肇
 源五雲 岩田和泉寺
 龍溪義子
 谷文晁 称文五郎
 江戸人
 皆川淇園 四出
 狩野永俊 称縫殿助
 木下應受 應瑞弟
 称直一
 僧六如 大津人
 橘松翁 称都平
 梅澤文川 姫路人
 霞離門人
 雄選 称新六

15 才

16 才

14 才

行書春月詩 并画	江邨台岳	行書墨竹詩 并画	橘春樹 梅仙男 豊後目
行書山水詩 并画	早崎伯機 名之衡 浪人	行書春日訪友詩	岡鶴鳴 名皐 河内坂城人
行書春雨詩	倉君雅 名瀧後 絲魚川人	行書元旦詩	松山士德 名身潤 公孫第三子
行書題畫山水 龍明 寫詩意	宮田士度 嘯翁 重出	行書墨梅詩 并画	荒木田南陵 名興正 伊勢人
行書 邊聞鶯詩	三雲仙嘯 重出	行書蝸牛上蕉葉詩 鶴山 画	紀龍窟 名廣 美濃殿草人
楷書醉眠詩	岩魚龍 名知昌 泉州左海人	行書春雨詩	牧野鳩阜 称士膳 越前田大夫
楷書雪鷺詩 鶴山画	田新甫 字季好 美濃殿草人	行書春日偶作	越貞齋 名敬 平安人
行書遊樂苑院詩	松不識 名元吉 公孫長子	行書村行詩	大野國寶 名鼎 越中富山人
行書早春郊行詩	伊藤繼先 名勤 君嶺子	行書咏栗詩	山田鼎石 名瑛 美濃殿草人
行書春郊晚歸詩	餘東廓 重出	行書喜晴詩	龍松桓卿 重出
隸書題画山水 鶴山 寫詩意	宮田嘯臺 名維貞 美濃加納人	行書題畫山水	畑橘洲 名元積 平安人
草書春興詩	原玄龍 名統承 河内扶山人	行書山亭獨酌詩	中村錦洋 名冲 平安人
行書春郊作	松井仲念 名茂 平安人	行書咏敗天公詩	島采風 名羽 平安人
艸書鄰家盲女彈琴歌 并画	杉岡嗽桑 名通啓 平安人	行書河南道中詩	筱盤谷 名鋤 樺津早野人
行書雨後春望作	近藤龜峰 名芝露 龜山 太夫	行書美人春遊詩	久季成 名誠 平安人
楷書山房春事詩	越巢南 名高 平安人	行書早春郊行詩	柚木南畝 名義鶴橋 從經江州人
行書春月詩	永田西河 重出	楷書水邊垂 詩	藤士簡 名易 平安人
艸書 邊聞鶯詩 并画	紀竹堂 重出	行書春興詩	福俣命 名昌 丹後田邊人
行書江春入舊年詩	林岐山 名通土 佐知居郎	行書春園偶作	栗義王 名宣 平安人
行書春夜詩	筒井靖齋 称左一郎 泉州左海人	艸書咏紙寫詩	水野士勤 名廣業 平安人
行書墨竹詩 并画	岡南嶽 名貞起 越前土夫	行書獨酌詩	松山公瑾 名清 越後人
行書花岸泛舟詩 并画	僧玉 重出	行書春日寄興詩	平藍川 名惟男 津山藩人
行書春雨偶作	檀徂卿 名友規 平安人	行書呈龍川尺牘	柚木鶴橋
行書竹牡丹詩	永田尚 名嘉實 加納人	行書遊嵯峨詩	大田玩
行書春郊晚歸詩	朝倉荆山 名肇 平安人	以下十五幀墨君社中	

雪竹	僧主	称順堂
雨竹	小林龜溪	称順堂
露竹	貫東柯	称石
風竹	安沙井	近江人
露竹	西村南溪	近江人
風竹	源南山	重出
晴竹	藤西疇	平安人
露竹	源青霄	平安人
露竹	源甘谷	平安人
露竹	橘松翁	重出
露竹	小野梅園	大津人
晴竹	源凌雲	近江人
露竹倚石圖	僧德母	江州勢田
露竹倚石圖	僧君山	江州石山
本願寺新門主書其他七幀別録通計二		雲住寺
百六十三幀隨得録之非敢為品秩于其		密藏院
間也		知足庵
嘯風亭雄選拜識	刷印(雄)	刷印(選)

掌檢	蘭	大江成美	君山
	南溪	藤正候	三疆
	三學	紀止	子基
	竹堂	紀寧	清夫
	岐山	平信寛	士猛
	掉湖	源直行	仲方

21才

21ウ

22才

22ウ

今展此冊諸名家風流逸韻可想知也余既喜遍目其筆跡而猶以不能盡面其笑談為憾焉

耳 愚山慎題 刷印(愚)

刷印(山)

裏見返し

註

- 1 日本書誌学大系45『相見春雨集』三(書藝堂書店 平成四年)に再録。
- 2 東京芸術大学附属図書館『脇本文庫目録』(一九七六年)参照。
- 3 先述相見氏の「東山の書画会」。
- 4 漢文の引用に際して、旧漢字を新字体に適宜改めたほか、私に訓点を施した箇所がある。なお、『淇園文集^{初編}』(寛政十一年刊・『淇園詩集^{初編}』(寛政四年刊)・木活本『淇園文集』(文化十三年序)・写本『淇園文集』の引用は、『近世儒家文集集成 第九卷 淇園詩文集』(べりかん社 昭和六十一年)による。以下同。
- 5 『池大雅』「大雅の画譜」は、ともに日本書誌学大系45『相見春雨集』二(書藝堂書店 昭和六十一年)に再録。
- 6 引用は、東大史料編纂所蔵本に拠る。なお、引用に際して、句読点及び濁点は私に施した。
- 7 『鴻の巣抄』(八) 二 東山新書画展観」(『美術史学』 昭和十九年一月号)
- 8 この折の俳諧の記録は、暁台編『風羅念仏』法会之巻(天明三年三月序)に収められており、同書中に「同(田邊註・天明三年三月 十四日 洛東於安養寺端寮興行)」と見える。
- 9 『角川日本地名大辞典』(角川書店 参照。六坊のうち、左阿弥は料亭として、今なお、その名を留めている。
- 10 新修『京都叢書』第九卷(臨川書店 昭和四十三年刊)所収の影印本より引用。
- 11 文人が好んで集った、円山という場所の空間的広がり・造りについては、出村嘉史・川

崎雅史・田中尚人『近世の京都円山時宗寺院における空間構成に関する研究』（「土木計画学研究・論文集」十八号、二〇〇二年九月）に詳しい。

12 「円山勝興庵正阿弥」の箇所では、まさに「書云 図が描かれている。

13 この箇所「声」の字は「土」の部分がない略字。

14 この箇所「磬」の字の「石」の部分を朱にて「水」と改めている。

（たなべ なほこ・九州大学大学院博士後期課程）